

音楽教育とハイテク

Music Education and High-technology

M の教育 (5)

鈴木 寛 (兵庫教育大学教授)

スキーマの形成 (2)

9月になれば行事の2学期が始まります。コンクールのシーズンでもあります。コンクールといえば「練習」や「特訓」という言葉が付きものです。

この「練習」や「訓練」にハイテクは関係があるのでしょうか？

典型的な吹奏楽の「朝練（早朝練習）」の練習に「ロングトーン」と称する練習があります。特に金管の練習ではこのロングトーン練習ではパイプオルガンのような音量、音質、ピッチのふらつきのない唇と均一な呼吸の練習が要求されます。実際にそんな音を必要とする音楽は少ないのですが日本の吹奏楽ではこのロングトーンの練習を「体育会系」の練習のようにやります。この世界にはハイテクの入り込む余地は無いようです。

もし何の努力もなく均一な音量や音質とピッチがボタン一つで維持できる装置があればハイテクかも知れませんがそんなものはありません。

例えばピアノの3本ペダルの真ん中のサステナート・ペダルは初心者のピアノには無いハイテクですが実際にそれを効果的に踏んでいるピアニストは日本には殆ど居ない（教えられていないからかも）のと同様、半ば徒弟制度のようなカリスマの指導に従う場面が多い吹奏楽の世界は「根性」と「努力」で「技術」を押しつけることが多いようです。

ワープロが上達したからと言って字がきれいに書けるようになるわけじゃないのと同じで、便利なハードやソフトが登場しても演奏がうまくなるわけではないという考え方が根強くあります。それでいて「効果的な指導法（訓練法）」の研究には余念がありません。

そのような指導者にとって「根性」「努力」こそが大切であるとする「体育会系」の練習や訓練をおろそかにすることは許されない事なのです。この訓練を通して得られる技術は「小脳モデル」と呼ぶパターンで脳に記憶されます。コンピュータのメモリーにRAMとROMがありますが、OSはROMで提供されるように、人間のOSである基本的行動（手足や口等の運動のための動作をいちいち記憶から呼び戻す必要のないもの）はすべて大脳経由の手続きを省いて、殆ど無意識でその行動がとれるように小脳の運動パターンとして処理しているわけですが、この小脳モデルを形成す

る方法は「反復練習」と「条件反射」なのですが、それをコントロールする神経系統は「運動神経」であって、倒れずに自転車に乗るのと同様に大脳による複雑な回路を迂回しているわけです。

ということは音楽の技術的練習が体育会系の練習と何ら変わらないことは当然のことなのです。

新入野球部員が球拾いばかりをやらされているのと似た部分もありますが一度も美しいメロディを吹かせて貰えず、アンサンブルにも参加させて貰えない「丁稚奉公」の下積みが本当に吹奏楽に必要なのかいつも疑問に思っています。

「条件反射」と言えばもう最近ではあまり見かけなくなりましたが、吹奏楽の練習で指揮者が何かを注意したり指示すると、間髪をいれず全員が声を揃えて「ハイ！」と返事をする軍隊式教練。あれは背筋が寒くなると多くのコンクール審査員が言います。生き生きとした個人の集まりではなく、全体主義の歯車のひとつとして楽器を担当させられている丁稚さんたちは本当に気の毒に思えてなりません。

スキーマというのは知識や認知の構造のことであり、条件反射の構造のことではないのです。そのような習慣を長年にわたって形成した彼（女）らは条件反射のみに反応する音楽的能力をしっかりと身につけているのでは無いでしょうか。

サイレント○○というシリーズのハイテク楽器（補助具）はピアノから金管楽器、弦楽器に至るまでこの10数年の間に開発され、住宅事情や音環境への配慮から広く使われるようになりました。電子楽器のヘッドホン環境とは根本的に異なるのはアコースティック音源を直接制御するという本来の楽器演奏のスタイルに限りなく近いという事です。できれば早い時期から丁稚さんたちにこのハイテク楽器で周囲を気にしないで済む自分の音と向き合った練習を経験させ、外部入力の他のパートとのアンサンブルも経験させることで音楽的なスキーマが形成されたと願うのですが・

いつもコンクールに出てくる小学校のオーケストラの弦楽器が何故か毎年音程が悪いのを不思議に思っていました。ある時彼らのバイオリンの指板にポジションのシールがしかも不正確な位置に貼られていることを知りました。悪い音程が伝統となったのにはそんなハイテク指導法（？）もあったのです。